

新田 尚名誉会員の御業績を偲んで

日本気象学会名誉会員の新田 尚先生は2023年4月2日に90歳で御逝去されました。私は気象庁勤務中も退職後も永らく御厚誼を頂きましたので、古い記憶をたどって御業績を偲びたいと存じます。当時の習慣で先輩の方を「さん」と書くことに致します。

新田さんは1955年に東京大学を卒業後、気象庁に入られました。最初の任地の大阪管区気象台勤務の頃から数値予報に注目され「数値予報（NP）研究グループ」に参加されました。その後「電子計算室（現在の数値予報課）」に移られ数値予報の進展に寄与され、数値予報に関する論文で東京大学から理学博士の学位を得られました。この間アメリカ気象局数値予報センター、イリノイ大学で研究生生活を送られ、さらにWMOにも出向され、帰国後には数値予報班長に就任されました。在外勤務で海外研究者との交流を深められ、その経験を帰国後の国際学術交流にも活かされました。例えば、海外の数値予報センター・研究機関の研究報告（プロジェクト報告）の入手などに努められました。海外の研究成果は専門誌にも掲載されますが、プロジェクト報告では詳細具体的な内容が報告されている点で有益な情報源です。さらに気象庁の数値予報の現状と開発計画の報告書（英文；WMOや世界の数値予報センターに送付）の内容の充実を図られました。また海外の研究者との交流を介して多くのメンバーに在外研究の機会を紹介されました。

指導にも様々な個性があり、細部にわたって指導する方もいたり、適切な人材を集め研究環境を整えて後は各人の自由に任せる「放牧的な指導」をする方もいたりしました。数値予報課では伝統的に「放牧的指導方針」を取っていました。新田さんも優れた「放牧的指導者」でしたが、さらに各人の自己評価を求める雰囲気を作られました。このような環境の中で多くの方々が活躍して1980年代の数値予報の発展を支えました。私とほぼ同年代の方々（一部の方々は記すに留めます）、北半球4層格子モデルを8層に改良された滝川さん、新狭領域モデルを開発された山岸さん、全球スペクトルモデルを開発された金光さん、狭領域スペクトルモデルを開発された巽さん、客観解析に最適内



気象庁長官時代の新田さん（平成4年5月13日撮影 気象庁提供）。

挿を導入された柏木さん、プログラム管理体制を確立された平木さん、ノーマルモード関数を使用した力学初期値化を開発された工藤さんなどを懐かしく思い出します。

新田さんは御自分の意見があっても、批判や会議での発言を控えておられました。「分からぬ人に言っても無駄だ」とお考えだったのでしょうか。英語でも直截的な表現を避けておられました。WMOの会議の後で、中国気象局の人から「新田博士は diplomatic gentleman でしたが…」と言われたことがありました。

新田さんのWMO在籍中（1960年代後期）、GARP（Global Atmospheric Research Program）が計画されました。新田さんは度々GARPに関する情報を学会誌「天気」に寄稿されましたが日本の気象界の反応は鈍かったと感じられます。しかし、1970年頃から日本でもGARPのサブプロジェクトを行う検討が始まり、台

風発生域の観測も検討されましたが、観測網の展開が困難なため黒潮海域気団変質の研究計画（AMTEX）に変わりました。大学研究グループの責任者が研究費を獲得するに際して「地球大気開発計画」と称する GARP からかけ離れた名称を使いましたが、国内研究者からは批判が生まれませんでした。新田さんは違和感を持たれたらしく、「地球大気開発計画」の呼称は使用されませんでした。AMTEX も「亜熱帯域の気団変質に伴う低気圧活動の研究」は迫及されず「黒潮海域の気団変質研究」に留まってしまいました。

TOPEX (Typhoon Operational Experiment) にも触れておきます。1979年頃、台風委員会などの要請を受けて、気象庁が台風に関する研究観測計画を引き受けました。ところが観測網展開が困難で実行が危ぶまれる事態になり、新田さんがその対応に当たることになりました（数値予報班長の任務ではありませんが WMO での経験が頼みにされたのです）。そして研究観測を伴わない既存データの活用・各国予報官の気象庁における実地トレーニングによる台風予報技術向上を目的とする TOPEX が実施されることになり、新田さんは予報部業務課長としてこの事業を推進されました。これは新しいタイプの「実験」として WMO でも評価されました。

新田さんはその後、総務部企画課長・予報部参事官・沖縄気象台長・気象庁予報部長さらに気象庁長官

として活躍されました。退職後はしばらく気象情報会社ハレックスの役員につかれましたが、会長への就任を固辞されたと漏れ聞いております（気象庁 OB が関連分野の役職に長期間つくべきではないと考えられたのでしょう）。

新田さんは気象知識の普及にも貢献されました。気象学関連の多くの書籍を執筆され、辞典・叢書の編集者としても多くの方々に出版の機会を与えられました。更に気象普及講座も企画され、海外協力事業団の英語の講義もされました。御著書・講義は懇切・平明でしたが、御自身の見解を述べることを控えられたためやや平板（WMO 報告物の様に）になったことが惜しまれます。

新田さんは長年に渡る御功績により、瑞宝重光章や気象学会藤原賞を受けられ、気象学会名誉会員にも推挙されておられます。

新田さんとの個人的なお付き合いは、気象庁退職後も続きましたが、最近ではコロナ感染症のため会合も無くお会いする機会がありませんでした。昨年のお手紙では「要介護 1 に認定されましたが、元気にデイケアに通っています」と書かれておりましたので、突然のご逝去の報に接し驚いております。

あらためて長年にわたる温かい御厚誼に御礼申し上げます。御冥福を御祈りいたします。

(二宮洸三)